

GCL NEWSLETTER 第 45 号 (2017.07)



- ◆ IEEE TenSymp で GCL 活動を報告
- ◆ 特別企画 GCL 新入生座談会
- ◆ 新任の先生のご挨拶
- ◆ 海外インターシップ滞在記

IEEE TenSymp2017 で GCL 活動を報告

GCL コース生や教員が今年 7 月にインドで開かれた IEEE TenSymp 2017 に参加し、GCL の活動や昨年度の GCL 自主研究企画プロジェクトの成果などを発表しました。IEEE TenSymp 2017 に参加したのは、Amir Gharehbaghi 先生、塚田学先生、GCL コース生の和家尚希さん（D2）、任喜史さん（D1）、土屋祐一郎さん（元コース生）、渋谷遊野さん（D2）です。



写真左から、任さん、土屋さん、Gharehbaghi 先生、塚田先生、渋谷さん、和家さん

IEEE TenSymp は "Technologies for Smart Cities" をテーマに、今年 7 月 14 日から 16 日にインド南部のケーララ州コーチで開かれた国際会議で、"Smart Buildings" や "Smart Communication", "Smart Education" など多彩なテーマのもと世界各地の研究者らが研究成果を報告しました。

GCL からの参加者は、学会初日に開かれた "Smart technologies using advanced ICT Technologies: innovations and practices towards smarter society" と題するワークショップで、プレゼンテーションを行いました。ワークショップの冒頭、GCL プログラムの概要や目的、自主研究企画プロジェクトの意図などを Gharehbaghi 先生が説明しました。続いて、塚田先生が "Autonomous vehicle supported by Cooperative ITS" と題して自動走行車のプロジェクトについて発表しました。和家さんは "Sight: Sonification of Affordances for the Stand Alone Blind Navigation" と題し、周囲の環境や状況の変化を音の

変化として知覚することができる感覚拡張デバイスを紹介しました。渋谷さんは、災害時の ICT の活用事例や支援物資のロジスティクスにおけるデータ分析などについて "Disaster Logistics for Building Resilient Communities" と題して発表しました。任さんと土屋さんは、医療情報をデータベース化するソフトウェア ASHA fusion の開発とネパールでの展開に関して、"ASHA: Affordable and Sustainable Healthcare Access" と題して、プロジェクトの成果を報告しました。

発表者のプレゼンテーションが終わるたび、会場からは質問や意見が多数上がったほか、ワークショップ終了後も発表者と参加者との意見交換が続くなど、参加したコース生にとってプロジェクトをブラッシュアップする良い機会となりました。参加したコース生は TenSymp で得たフィードバックをもとに、それぞれのプロジェクトをさらに発展させて行く予定です。

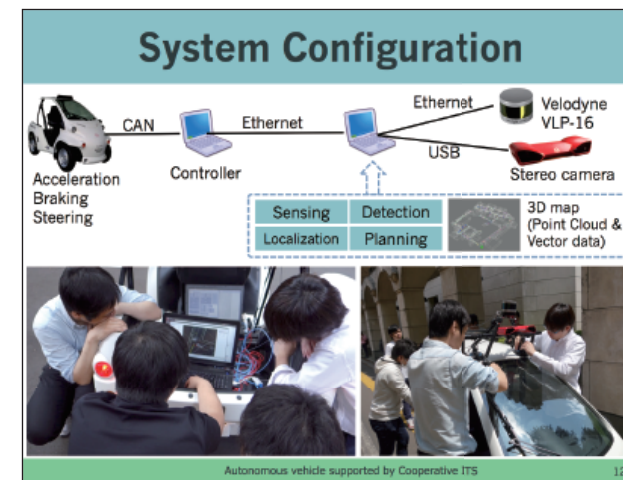


Program Overview

- Autonomous vehicle supported by Cooperative ITS
 - Manabu Tsukada (Assistant Professor at Graduate School of Information Science and Technology)
- Sight: Sonification of Affordances for the Stand Alone Blind Navigation
 - Naoki Wake (PhD student of Graduate School of Information Science and Technology)
- Disaster Logistics for Building Resilient Communities
 - Yuya Shibuya (PhD student of Graduate School of Interdisciplinary Information Studies)
- ASHA: Affordable and Sustainable Healthcare Access
 - Yoshifumi Nin (PhD student of Graduate School of Public Health)
 - Yuichiro Tsuchiya (Ms in Mechano-Informatics)

आशा नेपाल प्रोजेक्ट

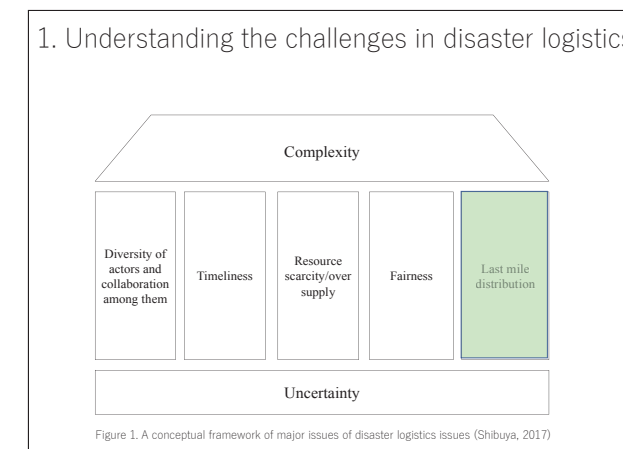
GCL



自動走行車のプロジェクト資料 (塚田先生の発表より)



和家さんが発表した Sight 資料



災害ロジスティクスの課題 (渋谷さん発表より)

Ongoing project: "Pharping Project"

Bridge a small hospital and health activities from Kathmandu

Situation:
Community hospital in a rural area

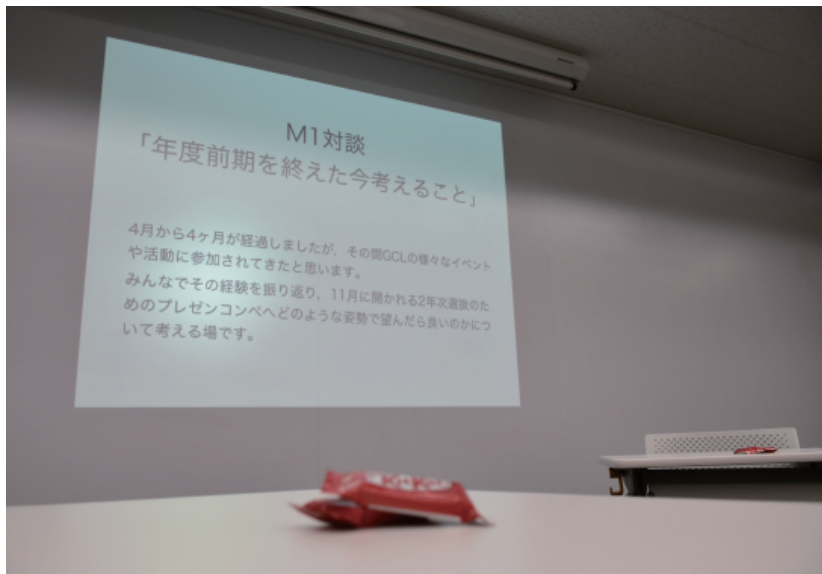
Objective

- Explore potential needs from the record of daily practice
- Organize the information to enhance the collaboration with other organization

任さんと土屋さんのプロジェクト ASHA の概要

■ 特別企画 GCL コース新入生座談会（その1）

GCL に新入生が加わってから 4 ヶ月が経過しました。様々な思いや期待を抱いて GCL コース生として入学した修士課程一年のコース生の皆さんに、GCL コース生としての修士課程 1 年前期を振り返っていただきました。本号ではその第一回目として、医学系研究科健康科学・看護学専攻の石井馨子さん（M1）、情報理工学系研究科コンピューター科学専攻の徐立元さん（M1）、学際情報学府先端表現情報学コースの廣瀬遥さん（M1）、農学生命科学研究科の田熊文香さん（M1）にお話を聞かせていただきました。



GCL への期待とイメージ

司会：渋谷（D2、以下司会）：皆さん G C L に入って 4 カ月が経過しましたが、そもそもどうして G C L に入ろうと考えたのかや G C L に入る前に抱いていた GCL のイメージについてお話しいただけますか。

廣瀬さん：4 月に開かれた G C L の説明会で先輩たちの話を聞いて、G C L に来ると友だちができるよと（笑）。それで入った次第です。

田熊さん：私は、自分の研究分野のみからのアプローチでは、社会に実際に貢献することが難しく、他の分野の人の協力がないとなかなか社会を変えていくことはできないと考えていて、他の分野の人とのつながりを作りたいと思い G C L に応募しました。

徐さん：僕は学部時代から GCL コース生の先輩と仲良くて、それで「こういうのがあるから、徐くんもぜひ」と。また、たまたま僕の指導教員が G C L の先生でお勧めされました。僕は機械学習が専門



石井 馨子さん（医学系研究科健康科学・看護学専攻）

看護管理が専門。医療現場での従事経験を経て大学院へ入学。病院等の組織と個人との関係に着目し、個人の知識がどのように組織に還元されるのか等について研究する予定。

徐 立元さん（情報理工学系研究科コンピューター科学専攻）

機械学習が専門。「ラスベガスで最も儲かるスロットマシンを見つける」というようなモデリングを行っている。研究の応用先として医療や情報、広告の最適化などがある。コース生との交流を通じて社会課題を見出したい。



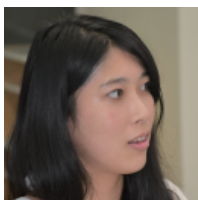
ですが、田熊さんと同じで、機械学習と言っても基本的にはある問題を解いてるんですけど、その問題を見つけるのは結構大変だと思っていて、他の分野の人が困っていることを僕の研究分野に持ってきて解きたいと考え G C L に入りました。



石井さん：私も担当の教員から「こんなのがあるよ」と GCL を教えてもらいました。もともと、臨床で働いていた経験もあるのですが、医学の世界では色々な政策などを提案する動きはあるものの、狭い世界で自分たちの中だけで考えている部分もあります。世間的にはパラダイムシフトのように潮流は様々に変わっているのに、なんでこんなにもがいているんだろうというジレンマはずっとありました。GCL のパンフレットを見ながら、私がやりたいことと GCL が掲げているビジョンは似てるかとも思いい、様々な期待を持ちながら入りました。入ってみて実際様々な方と会えて刺激的なので、私は GCL に来ている時は、所属の教室にいるよりヒーリングの時間になっている感じが最近はしています（笑）。

司会：なるほど、ありがとうございます。実際に GCL で過ごした前期を振り返っていかがでしょうか。

廣瀬さん：実際入ってみて最初は GCL コース生がいっぱいいると感じていたのですが、ワークショッ

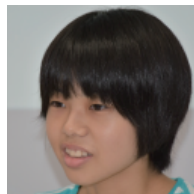


廣瀬 遥さん（学際情報学府先端表現情報学コース）

クラシック音楽を若年層を含めた幅広い層に楽しんでもらえるようなコンテンツの提供方法の提案が研究テーマ。GDWS やインターシップ制度をフルに活用して研究を進めたいと考えている。

田熊 文香さん（農学生命科学研究科）

特技は空手。他分野の学生とのコラボレーションに GCL の魅了を感じている。目下の研究テーマは、水産物の価格の国際比較や東日本大震災の国内水産物の価格への影響。



プや授業などに参加する中で、割と固定のメンバーとよく顔を合わせるようになっていきました。100 人くらいいる中で漠然と友だちを作るよりかは、毎回顔合わせる人たちと仲良くなって、そこまでの数の広がりはなくとも、密な関わりができるようになり良いと感じています。

明確なビジョンを持つ学生が多い

田熊さん：私は GCL に入り上の学年のコース生や他分野の人たちと話しをしていると、自分はすごく甘いということを実感しました。合宿への参加を通して、もっと明確な問題意識を持たなければと感じました。また、廣瀬さんがお話しされていたように、最初はというふうにみんなと仲良くなっていけるのかが分からなかったのですが、最近は色々なコース生との仲を深めることができるようになりました。一方、GCL は想像していたよりやるべきことが多いとも感じています。

司会：なるほど、特に M 1 の時は授業も多いですね。徐さんはいかがですか。

徐さん：G C L に入って一番驚いたのは、多くのコース生が明確な問題意識を持って大学院へ入・進学し



ていることです。僕ら理系、特に理数系は結構ノリで院進学する人が多くて僕がいた学科も 60 人中就職したのが 2、3 人というような感じでした。周りが修士行くから俺も行くみたいな人も多くて、僕もその気があったんですけど、GCL に来てみて他分野の、それこそ医療系の方や文系の方などと話をしていると、彼ら彼女らがものすごい覚悟を持ってきていることを知り、僕も頑張ろうとすごく良いモチベーションになりました。

あとは、すごく楽しいですね。合宿もすごく楽しかったですし、他の学生とのコラボも楽しいです。合宿終わった後に廣瀬さんに誘ってもらって自主研究企画に応募して、最終的には選考から落ちてしまいましたが、色々話し合ったことは良い経験となりました。石井さんとも何か一緒に研究をやろうという話もあったりと充実しています。

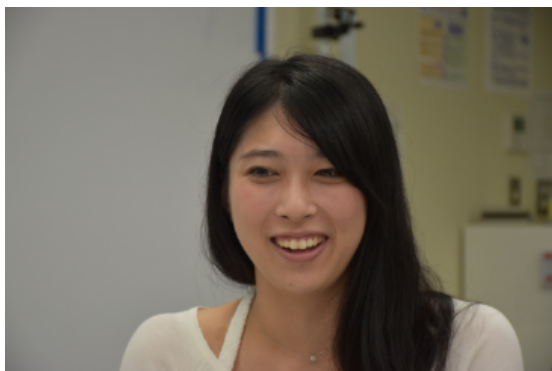
司会：確かに、様々な専攻の方と自由に研究をやらせてもらえる環境はなかなかないですよ。石井さんはいかがですか。

分野を超えたコラボレーションの課題

石井さん：私は医学の世界で育ちながらも、でもなるべく外界、様々な分野ともつながろうと思いつながりながら生活していたつもりだったんですけど、あらためて G C L に入って、他分野の方とのコミュニケーションが取

りづらいなと少し衝撃を受けました。それぞれの分野で言語が違うというか。それぞれ専門性があるところでしっかりとやってきた方たちなので主張もしっかりとしていて。私はもちろんそうやって主張してもらったほうがウエルカムなんですけど、やはり最初はこれほど個がしっかりとしている方々が集まっているんだと衝撃を受けました。言語も違うから最初は戸惑って、やっていけるかなという不安もあったのですが、話していくうちにだんだん打ち解けて個々を知り、互いを知っていく過程を経た今は、逆に得るものが多くて楽しいと思っていますね。

司会：なるほど、ありがとうございます。2 年次選抜やプレゼンコンペもそうですが、基本的には分野外の人に自分の研究を説明するので、言語が違う中でも、自分の言葉で噛み砕いて他分野の方々にどう伝えるかという視点も大切ですよ。自分が相手を受け入れよ



うとする気持ちはもちろん、伝え方も GCL を通して勉強になりますよね。

では続いての質問に移りたいと思います。G C L コース生として活動を行う際に困っていることはありますか。

徐さん：困ったことは、完全な愚痴レベルで、土曜つらいとか、6 限つらいとか（笑）、それぐらいの感想しかないですね。困ったことは特になく楽しいです。

廣瀬さん：私は個人的には M 1 のよく知った顔の人は知っているんですけど、それ以外の人、特に M 2 以上の方はほとんど知らなくて、研究プロジェクトチームに他のメンバーを誘いたいと考えた時に、あまり顔が思い浮かばず困りました。これからもたぶんそのことで困りそうだなとも感じています。

司会：なるほど、田熊さんは他のメンバーとのつながりについてどのように感じていますか。

田熊さん：確かに、他のコース生とつながる機会はまだまだあっても良いと感じています。先日のプレゼンコンペでも、発表者に質問したかったのですが、あまり質問の時間がなくて… 終わってから休憩の時間まで発表者が会場に残っていたら話しかけたかったのですがすぐに帰ってしまった方もいて少し残念でした。

ICT と社会課題の接点を見出す

司会：石井さんは困っていることはありますか。

石井さん：Tech Talk Series を聞いていると、実装系の研究に関するプレゼンが多いと感じました。私は G C L 入ってから國吉先生の福島震災時のロボットの



お話にすごく感銘を受けました。國吉先生が製作したロボットが実際の現場ではあまり使えなくて、でも隣を見てみると、アメリカの軍で練習を重ねているようなロボットがどんどん使われていたと。こんなに素晴らしい先生でもそのような経験をされているんだなとストーリーが印象に残っています。やはり、技術と社会とのコネクトが大切なのだと感じました。Tech Talk Series は私たち人文社会学系からすると、凄い技術があることは勉強になるのですが、他方で、今本当に社会が必要としているものや社会的課題などにフォーカスし、人文系とのコラボレーションからリーダーシップ取って社会を変革していくといった話題があってもいいのではと感じています。GCL の授業ではそういった話題があり大変興味深かったです。

徐さん：確かに、Tech Talk は情報理工系の方々が面白いと思うような話が多いかもしれないですね。

司会：徐さんは解決すべき社会課題を見つけるのが GCL に入った目的の一つともおっしゃっていましたがいかがですか。

コース生同士の繋がりがもたらすもの

徐さん：GCL に入って、様々な他分野の話題を他のコース生から聞くことができ僕はすごく面白いと感じています。実はこないだ石井さんと研究について 1 時間ぐらい話したんですけど、そのような機会があることはとても嬉しいですし、自分の研究のネタになるものもあると思っているんです。石井さんの医療現場で感じた問題意識に関するお話はとても勉強になりました。

司会：なるほど、コース生同士のつながりを活かして、社会課題と技術を結び付ける「場」として、GCL を捉えているんですね。



徐さん：僕はそう思っていますね。GCL側が何かやるというよりも、GCLを通して仲良くなってコース生の中でやり取りしていくことが大切と感じていますね。

司会：皆さんは、M2 選抜プレゼンを控えていますが、M2 進学後のビジョンはどのように描いていますか。

田熊さん：実は私は2年次に進むかどうか少し悩んでいます。GCLのプログラム一つ一つがしっかりとしたものが多く勉強になり成長を感じているのですが、自分の中でキャパオーバーなのではないかなとも感じているからです。GCLの活動には魅力を感じているからこそ迷っていますね。

徐さん：技術系ですが、解きたい問題は現実世界の何かから落ちてくるものなので、そのような実社会での課題をうまく拾いながら修論書いていきたいと思っています。

石井さん：GCLってこんなに楽しくて、こんなに色々なことに取り組んでいるということをもっと大学の他の方々にも知ってもらえる機会があるといいなと思いますね。東大の医学系にもリーディング大学院が幾つかありますが、GCLはせっかく素晴らしい人たちがいっぱい集まっているのもっと外にアピールしてGCLをうまく活用できたらと感じます。

廣瀬さん：GCLのインターンシップ制度やワークショップ（GDWS）は自分の研究の中で大変有用であると思うので、そうしたGCLリソースをうまく活用していきたいと思います。

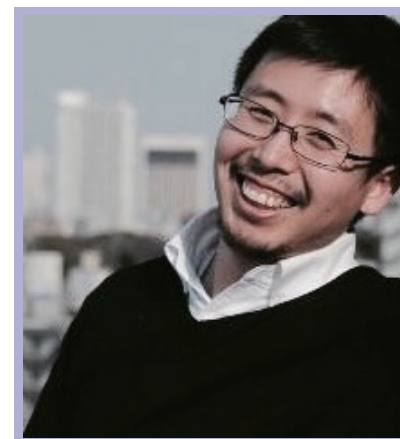
司会：皆さん本日はお忙しい中本当にありがとうございました。

（企画・写真：赤池美紀、司会・構成：渋谷遊野）



■ 着任のご挨拶

2017年4月から着任されたGCLに着任された杉野弘明先生からのご挨拶を掲載します。GCLコース生への期待のこもったメッセージです。



杉野弘明先生

大学院農学生命科学研究科 農学国際専攻・特任助教
環境心理学 博士（人間環境学）

GCLに関わらせて頂くようになって、既に3か月が経ちました。合宿やワークショップなどへの参加経験を通して、あらためて面白く、やりがいのあるプログラムに参加させて頂いているなど感謝している次第です。私は、農学生命科学研究科農学国際専攻の特任助教として参加させて頂いておりますが、実は専門分野は心理学です。ただし、心理学の中でも人間と環境との“相互浸透作用”を着眼点とする環境心理学という分野ですので、分野や手法に拘らないフィールドにおける課題解決指向型の研究を主に行ってまいりました。



博士課程の時には工学部の都市計画学研究室にて学び、前職では当大学内の海洋アライアンスという研究機構にて海に関わる合意形成手法について研究するという、見る人によっては節操のないと言われかねない研究活動歴です。現在では農村や漁村のような山や海

といった自然環境との境界にある地域をフィールドとした、人間と環境との関係性を探る研究に没頭するようになり、現在のポジションに就く運びとなりました。

心理学の王道からは外れに外れてしまった分、分野横断が当たり前の私にとっては、GCLの皆さんが行われている研究に大変多くの刺激を頂いております。4月以降、イベント等で興味深いコラボレーションを各所で拝見し、それこそ“分野浸透型”の研究を行おうとしているGCL生の皆さんを目の当たりにして、私の研究なんてまだまだ“分野横断”レベルだなと反省することもありました。最近ではようやく私も環境に馴染み始めてきましたので、今後はGCL生の皆さんともっと親密な関係を築きながら、一緒に当GCLプロジェクトを盛り上げていければと意気込んでおります。どうぞよろしくお願いいたします。



■ GCL 海外インターンシップ滞在記 荒川清晟さん (M2)

2017 年 6 月～7 月にかけて、GCL のカリキュラムの一環として、オランダでブランディングを行っている SODACHI（企業）で研究インターンを行いました。

この記事では、今後 GCL で海外インターンシップを行う方に向けて、準備から帰国までの流れや注意点、帰国して感じたことを簡単に紹介したいと思います。



準備～帰国まで

—受け入れ先へのアポイントメント

特に文系の学生にとって、「就職と関係がなく、かつ研究と関連ある業務のできる海外の企業」を探すことはなかなか大変だと思います。私の場合は国内インターンシップを行っている株式会社博報堂から SODACHI をご紹介いただきました。ご紹介していただくにあたり、自分のスキル、研究内容、諸々の条件をお伝えし、その上で条件に合うインターン

シップの受け入れ先をご紹介いただきました。（もともと株式会社博報堂では 2016 年 9 月からインターンシップを行っており、こちらも学内の社会人学生の方からご紹介いただきました。）

—手続き

留学の流れとしては、2017 年 3 月にインターンシップの受け入れ先が決まり、4 月に研究計画書の変更（前年に提出していたものと変更していたため）を行い、5 月に飛行機のチケット、OSSMA・保険の加入、留学届け、宿の手配等を行いました。宿の手配以外は



1 日ででき、宿の手配は Airbnb を用いて交渉しました。

手続きの注意点としては、概算払いを行う際には時間が必要なことです（おそらく 3～4 ヶ月程度必要）。ぎりぎりでの申請の場合は立替え払いになります。

—オランダ滞在中

実際にオランダでは企業・施設でインタビューを行い、それについてレポートを作成したり、カンファレンスに出席し、それについてレポートを作成してきました。多くの人と名刺交換をすることで人脈を広げることができました。

また、オランダの滞在に関しては、クレジットカードを使えないことが多いので、国際デビットカードを作っていくことと、レトルトの日本食を持っていくことをお勧めします。

—帰国後

帰国後は報告書などの提出書類を提出し、承認され

ればインターンシップは終了です。

まとめ

オランダでのインターンシップを振り返ってみると、周りの「人」に恵まれていたなと感じます。アムステルダムでは「人」に注目したブランディングを行っていますが、住んでいる人、訪れている人など皆親切で、地域愛に満ちた方が多かったように感じます。

反省点としては、企業でインターンシップを行っているので、こちら側からもっと何かしらのビジネスに関係することを与えることができたならよかったなと思います。今回のインターンシップでは周りの人に恵まれて多くの機会を得ましたが、今後は機会を与えることのできるような人材になりたいと感じました。

（文・写真：荒川清晟 学際情報学府修士課程 2 年）

編集・発行：情報理工学系研究科・GCL 広報企画

渋谷遊野 (学際情報学府 D2), 赤池美紀 (学際情報学府 D1), 増田理恵 (公共健康医学 D1), 山田文香 (情報理工 D1), 荒川清晟 (学際情報学府 M2), 小川浩寿 (農学国際 M2), 松本 啓吾 (情報理工 M2), 河合啓太郎 (総合教育科学 M1)

発行責任者：谷川智洋 (特任准教授)

〒 113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学工学部 8 号館 621 号室 GCL 事務局

E-mail : pr_plan@gcl.i.u-tokyo.ac.jp